

新聞記事による日本のコロナ禍における 高齢者のくらしの実態からみた思い

宇上紗永¹, 高田志穂², 足立佳音³, 西村康子⁴, 坪井桂子⁵

¹ 公立豊岡病院組合立豊岡病院, ² 神戸市立医療センター中央市民病院

³ 香川県立保健医療大学大学院保健医療学専攻, ⁴ 前神戸市看護大学, ⁵ 神戸市看護大学

キーワード: 高齢者、新型コロナウイルス感染症、人生の統合、その人らしさ、新聞記事

An Analysis of Sentiments from the Actual Life Situations of the Elderly in Japan Living among the COVID-19 through Newspaper Articles

Sae Ujo¹, Shiho Takada², Kanon Adachi³, Yasuko Nishimura⁴, Keiko Tsuboi⁵

¹ Toyooka Public Hospital, ² Kobe City Medical Center General Hospital

³ Kagawa Prefectural University of Health Sciences, Graduate School of Health Sciences

⁴ ex Kobe City College of Nursing, ⁵ Kobe City College of Nursing

Key Words: the Elderly, COVID-19, life integrity, Personhood, Newspaper Article

要 旨

コロナ禍において、政府から緊急事態宣言が繰り返し発出され、国民に移動や活動の自粛が求められ、従来通りの医療・福祉サービスの提供、人との交流が困難になった。特に、高齢者は新型コロナウイルス感染症に感染しやすく、感染すると重症化することから、くらしへの影響はより大きかった。しかしながら、これまでにコロナ禍の高齢者のくらしの実態や思いを明らかにした報告は、ほとんどみあたらない。

研究目的: コロナ禍の高齢者のくらしの実態からみた思いを明らかにする。

研究方法: 高齢者のくらしの実態からみた思いの詳細を明らかにするために、第4波の新聞記事を抽出、要約、意味内容ごとにカテゴリー化した。

結果: 第4波の記事583件から、【戦争時代の経験に重ねた現状の受け止め】【人生の終盤に生活の豊かさを失った悲しさや寂しさ】【喪失が増える中で残された人生への不安】【ぬぐいきれない感染への恐怖】【新しい生活様式になじめないことへの戸惑い】【ワクチン接種・予約に関する不安や不満】【長引く面会制限で抱いた相反する思い】【これまでとは異なる最期への思い】【感謝を忘れず周囲を思いやる気持ち】【困難の中で前向きに生きる気持ち】の10カテゴリーが生成された。

考察: コロナ禍の高齢者のくらしの実態からみた思いの特徴として、戦争時代の経験と重ねた受け止めをしており、恐怖の中で、「絶望」を助長しかねない状況にあったが、ライフレビューや語りを丁寧に聴くことで、意味ある経験となりうる可能性が示唆された。また、長い人生経験を活かし前向きに生きる強さや他者への思いやりが示されたことから、老年期の社会心理的課題である「統合」が促進されていたものと考えられる。そして、この統合の促進に人との繋がりが関係していたことは、老年期を健康に生きる上で重要な知見が得られたといえよう。

Abstract

Introduction: The repeatedly declared state of emergency due to the pandemic restricted the movements and activities of people, making it difficult to provide normal medical and welfare services, and to interact with other people. The spread of COVID-19 greatly changed the life of the elderly. However, there have not been many reports which featured the actual life situations and sentiments of those elderly people among the ongoing pandemic.

Purpose of Study: We aimed to clarify sentiments from the actual life situations of the elderly among the ongoing pandemic of COVID-19.

Method of Study: We conducted a qualitative study. We selected, summarized, and categorized the newspaper articles published during the latest fourth wave in order to clarify sentiments from the actual life situations of the elderly among the ongoing pandemic of COVID-19.

Results: The 583 articles published during the fourth wave, 10 categories were identified: to "accepting the reality as a reminiscence of the war years," "sadness and loneliness of losing the richness of life at the end of life," "anxiety about the life left behind in the face of increasing loss," "inextinguishable fear of being infected," "uncertainty about not getting used to new lifestyle," "anxiety and complaints about vaccination and vaccine appointments," "conflicting feelings felt during prolonged visitation restrictions," "sentiments for the last moments different from before," "caring, thankful attitude toward people around," and "strength to live positively in difficult times."

Discussion: Characteristic of the feelings from the perspective of the actual lives of the elderly affected by the COVID-19 disaster was the overlapping perception of their experiences of the war years, which, in the midst of fear, could have contributed to 'despair.' However it was suggested that careful listening to life reviews and narratives could be a meaningful experience. In addition, the social-psychological challenges of old age, such as integration, were promoted, as the participants showed strength to live positively, and compassion for others by making use of their long-life experiences. The fact that human connection was involved in facilitating this integration is considered important for healthy living in old age.

はじめに

我が国では2020年1月に日本に住む中国籍の男性に初めて新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の感染が確認された。2月にはダイヤモンド・プリンセス号の乗客乗員の感染が大きく報道された。COVID-19の感染拡大により、マスクや衛生資材等の不足、東京オリンピック・パラリンピックの延期、政府から緊急事態宣言が繰り返して発出され、国民には移動や活動の自粛が求められ、従来通りの医療・福祉サービスの提供、人との交流が困難になった。

その後、COVID-19の実態や治療法は少しずつ明らかとなり（忽那, 2021; 林, 2021）、ワクチン接種や治療薬の開発が進むものの、2022年2月現在、新たな変異株の出現により感染は収まらず、“with コロナ”を「新型コロナウイルスとの共存」と捉えるならば、“with コロナ”の社会の実現はまだ遠いと言わざるを得ない。特に高齢者は、COVID-19に感染しやすく、感染すれば重症化しやすく致死率も高い（忽那, 2021）ことから、感染拡大によって高齢者のくらしは大きく変化したといえよう。

このような状況における高齢者のくらしについては、外出自粛により、身体活動や感染対策に取り組む一方で公共施設の閉鎖等により社会活動に参加できず困っていること（市戸, 大内, 林他, 2021）、身体活動、社会活動の頻度低下を感じていること（大西, 廣瀬, 伊佐次他, 2021）が報告されている。

一方、Eriksonら（1986/1997）は老年期の心理社会的課題について、「統合対絶望」を提唱し、平山（1995）も「老年期を迎えると、彼らの生命を支える心身の健康とそれを維持する財政的基盤、さらには人間の存在の根拠である『生きがい』を喪失する機会が多くなる」と述べている。絶望に直面した際には、生きがいをもって生活することや、周囲の人との社会的つながりを持つことが重要とされている。これまでに、人間関係が孤独感の強さに影響を与えること（梶原, 牧, 2008）や家族や周囲とのつながりの中で感謝や社会的役割を果たせる喜びを感じることで自己効力感が高まり、寂しさや孤独感が軽減されることが報告されている（山口, 平田, 2018）。

そして、社会的なつながりが心身に影響を与える高齢者（Watanabe, Tanaka, Watanabe, et al., 2017; 田中, 高橋, 秋下他, 2017）にとって、このコロナ禍の状況は人生

の統合や老年期の発達課題達成への影響が推察されるものの、その基盤となる高齢者のくらしの現状や思いについて十分明らかにされているとはいえない。

そこで本研究では、コロナ禍の高齢者のくらしの実態からみた思いを明らかにすることを目的とする。

I. 方法

1. データ収集方法

コロナ禍における高齢者のくらしの実態からみた思いを明らかにするために、爆発的な感染拡大が起こった第4波：2021年3月～6月（神戸市新型コロナウイルス感染症対策第2次対応検証チーム, 2021）の朝日新聞、毎日新聞、神戸新聞の3紙の朝刊・夕刊の紙面を閲覧した。これら3紙のコロナ禍における「主語が65歳以上の高齢者であるくらしの現状」かつ「高齢者自身が発言した言葉を中心とした思い」が記載された新聞記事をハンドサーチで抽出した。この抽出には、高齢者本人による記事と家族をはじめとした他者から捉えた高齢者について高齢者の思いが語りや記録に含まれている記事をデータとした。

2. 分析方法

データ分析は、質的帰納的に行った。抽出した記事をデータとし、意味を損ねないように要約した。要約を研究目的に照らして、その意味内容の類似性、関連性のあるものを整理し、サブカテゴリー、カテゴリーを産出した。

3. 分析の厳密性の確保

分析結果は、老年看護学分野の研究者と繰り返し検討し、厳密性の確保に努めた。

II. 倫理的配慮

記事内の個人名や施設名などの情報については、匿名性を担保するため、研究者によって加工した。

III. 結果

1. コロナ禍における高齢者のくらしの実態からみた思い

第4波の抽出記事は、朝日新聞58件、毎日新聞119件、神戸新聞406件、合計583件であった。

コロナ禍の高齢者のくらしの実態からみた思いとして、10

の 카테고리、28 のサブカテゴリが生成された。(表1) 以下、【 】はカテゴリ、《 》はサブカテゴリ、「 」は記事、補足説明は()で示す。

1) 【戦争時代の経験に重ねた現状の受け止め】

このカテゴリは、1つのサブカテゴリで構成された。コロナ禍によって日常や社会が変化した現状を戦争時代の経験と重ね、現状を受け止めていたことから【戦争時代の経験に重ねた現状の受け止め】と表した。

「(ワクチン接種を希望していても、要介護5で接種会場に行けない父のような)弱者がないがしろにされる状況は、まるで戦時中のような。」

2) 【人生の終盤に生活の豊かさを失った悲しさや寂しさ】

このカテゴリは、以下の3つのサブカテゴリで構成され、【人生の終盤に生活の豊かさを失った悲しさや寂しさ】と表した。

(1)《人生の終盤に得た楽しみや生きがいを喪失した悲しみ》

このサブカテゴリは、感染拡大防止のために地域のイベントが中止され、人生の終盤に得た楽しみやそれぞれの高齢者が有する生きがいを喪失した悲しみを感じていたことから、《人生の終盤に得た楽しみや生きがいを喪失した悲しみ》と表した。

「コロナ禍にあつて、ある人々には落語などは不必要かもしれない。だが(中略)落語なしの暮らしは考えられない。子育ては終了し、連れ合いは退職した今、私の楽しみ・生きがいは古典落語のみ。(中略)寄席の灯を消さないでほしい。」

(2)《離れて住む家族に気軽に会えなくなった寂しさ》

このサブカテゴリは、感染予防のためには、同居していなければ家族でさえ容易に会えなくなったことに寂しさを感じていたことから、《離れて住む家族に気軽に会えなく

表 1. 高齢者のくらしの実態からみた思い

カテゴリー	サブカテゴリ
戦争時代の経験に重ねた現状の受け止め	戦争時代の経験に重ねた現状の受け止め
人生の終盤に生活の豊かさを失った悲しさや寂しさ	人生の終盤に得た楽しみや生きがいを喪失した悲しみ
	離れて住む家族に気軽に会えなくなった寂しさ
	生活の不便さから高齢者が疎外されたと感じる寂しさ
喪失が増える中で残された人生への不安	我慢の日々がこの先も続くことへの不安
	外出自粛による身体機能低下への不安
	収入が減少したことへの嘆き
ぬぐいきれない感染への恐怖	感染対策をしていない人に対する嫌悪感
	自らの感染を恐れて感染対策を徹底する覚悟
	ワクチン接種・接種予約を終えた安堵感
新しい生活様式になじめないことへの戸惑い	新しい生活様式になじめないことへの戸惑い
	予約に振り回されることによるワクチン接種の諦め
	自己判断を求められたワクチン接種への不安
ワクチン接種・予約に関する不安や不満	ワクチン接種による副反応への不安
	ワクチン接種会場の不備による不満
	入院・入所中の面会制限による孤独感
長引く面会制限で抱いた相反する思い	面会制限の中で家族と繋がれたことへの喜び
	家族の最期を見送ることができたことへの有難さ
	家族の最期を見送ることができなかったことへの無念
これまでとは異なる最期への思い	望む最期と叶わない現実の受け止め
	人に感染させまいとする気遣い
	周囲の人の健康を願う気持ち
感謝を忘れず周囲を思いやる気持ち	自身の健康や安全を守ってもらっていることへの感謝
	自粛生活の中で習慣や楽しみを新たに見出した喜び
	長い人生の思い出や経験を振り返り生じた前向きな気持ち
困難な中で前向きに生きる気持ち	周囲により影響を受けて今を前向きに生きる気持ち
	人との関わりを励みに自分も頑張ろうと思う気持ち
	今後の生活に夢や希望を抱く気持ち

なった寂しさ」と表した。

「娘たちと話したいことはあるが、コロナ禍で一年半以上会っていない。」

(3)《生活の不便さから高齢者が疎外されたと感じる寂しさ》

このサブカテゴリーは、感染拡大防止のためにこれまで生活必需品であった物を入手できない不便さから高齢者が疎外された寂しさを感じていたことから、《生活の不便さから高齢者が疎外されたと感じる寂しさ》と表した。

「ダイヤ改正に伴う駅の時刻表をもらおうと改札口の横の棚をのぞいたが、置いていない。コロナ禍による収入減で経費節減を求められ、デジタル化も加わり、今回は作っていないという。コロナ禍が駅の最小限のサービスまで奪っていることに、あぜんとした。パソコンもスマホも持たない高齢者にとっては痛手だ。コロナの収束が見通せない中、『老人は電車に乗るような外出はしないで』と暗に言われているようにも思え、寂しい気持ちを抱いた。」

3)【喪失が増える中で残された人生への不安】

このカテゴリーは、以下の3つのサブカテゴリーで構成され、【喪失が増える中で残された人生への不安】と表した。

(1)《我慢の日々がこの先も続くことへの不安》

このサブカテゴリーは、コロナ禍の我慢の日々が続き、自身も誰にも会えないまま亡くなるのではないかと不安を感じていたことから《我慢の日々がこの先も続くことへの不安》と表した。

「誰にも会えないままで 新型コロナがこのまま収束しないと、高齢者は誰にも会えずに死んでしまうのかと不安。(中略) 去年主人が亡くなったがコロナ禍で面会ができず、意識不明の最期の時に顔を見ました。心残りです。悲しかったです。悔しいです。」

(2)《外出自粛による身体機能低下への不安》

このサブカテゴリーは、外出自粛によって筋力が低下し、持病がさらに悪化することを不安に感じていたことから、《外出自粛による身体機能低下への不安》と表した。

「(筋力の低下によって悪化しやすい) 骨盤臓器脱で悩んでいて、その手術を6月に予定しています。コロナ禍に加えて花粉症もあり、家に閉じこもっている状態。年いくごとにひどくなるとか聞くと、(中略) 不安になってきて。」

(3)《収入が減少したことへの嘆き》

このサブカテゴリーは、飲食店や漁業を営む高齢者がコロナ禍で収入が減少したことへ嘆いていたことから、《収入が減少したことへの嘆き》と表した。

「(甲子園球場の近くで飲食店を営む70代の夫婦は)『入場客とともに営業が成り立ってきたので、売り上げは1年前から7～8割近くも落ち込んでいる。今さら何にも変わりませんわ』と嘆く。」

4)【ぬぐいきれない感染への恐怖】

このカテゴリーは、以下の3つのサブカテゴリーで構成され、【ぬぐいきれない感染への恐怖】と表した。

(1)《感染対策をしていない人に対する嫌悪感》

このサブカテゴリーは、自身は感染を恐れて対策を徹底している一方で、外出自粛やマスクの着用を徹底できていない人を見て嫌な気持ちになっていたことから《感染対策をしていない人に対する嫌悪感》と表した。

「先日、妻と久しぶりに喫茶店に入った。(その店は十分な感染対策をとっており)安心した。しかし、若い女性グループが飲み物を飲み終わった後もマスクを外して大声で長々と談笑していたことには閉口した。せっかく店が感染対策を施していても、これでは効果は薄くなってしまったと感じた。」

(2)《自らの感染を恐れて感染対策を徹底する覚悟》

このサブカテゴリーは、新型コロナウイルスに自身が感染することを恐れ、長い自粛生活に疲れを感じながらも油断することなく、自分にできる対策を徹底していたことから《自らの感染を恐れて感染対策を徹底する覚悟》と表した。

「私の母は、もう1年以上買い物は生協の宅配で、歯医者に行くことも控えている。(中略) 母は、(新型コロナウイルスは宅配便の段ボール箱では1日以上、紙幣では1週間生きていると経済再生相が発言して以来)、段ボールも紙幣もアルコール消毒するようになった。そこまでする必要はないと私が言っても、できることは全部やるという。」

(3)《ワクチン接種・接種予約を終えた安堵感》

このサブカテゴリーは、感染を恐れた長い生活の中でようやくワクチン接種ができることに一時的に安心していただけやワクチン接種の予約を終えてほっとしていた記事から、《ワクチン接種・接種予約を終えた安堵感》と表した。

「(ワクチン接種を終えた70代の方は)『スムーズに接種できて、今のところ副反応もない。重症化などのリスクが軽減されて、気持ちが少し楽になった』と話した。」

5)【新しい生活様式になじめないことへの戸惑い】

このカテゴリーは、1つのサブカテゴリーで構成された。コロナ禍になったことで感染対策のもと、新たな生活習慣が必要になったが、そういった新たな生活に馴染めない様子から《新しい生活様式になじめないことへの戸惑い》

と表した。

「3度目となる緊急事態宣言発令。70代の夫婦は、『(お店が)開いていると思ったら、閉まっていたり、線引きが分かりにくい。事前にいちいち電話で確認が必要ですね』と話していた。」

6) 【ワクチン接種・予約に関する不安や不満】

このカテゴリーは、以下の4つのサブカテゴリーで構成され、【ワクチン接種・予約に関する不安や不満】と表した。

(1) 《予約に振り回されることによるワクチン接種の諦め》

このサブカテゴリーは、ワクチン接種の予約電話が何度かけてもつながらなかったり、窓口で予約をしようとしても整理券をもらえない、またはそもそも窓口では予約できないと言われ不満や疲弊から諦める気持ちになっていたことから《予約に振り回されることによるワクチン接種の諦め》と表した。

「(高齢で独居のためワクチン接種に不安はあったが、かかりつけ医で)接種してもらえると安心してました。ところが、受付が始まって電話すると全然つながらない。(中略)(病院に行く)『受付は終了しました』と張り紙が貼ってあって。悔しくて涙が出ました。(中略)こんな情けない思いするんやったら、もう接種せんでええわ。」

(2) 《自己判断を求められたワクチン接種への不安》

このサブカテゴリーは、高齢者はワクチン接種を優先されたものの、心の準備もできないまま自分で判断、接種することへの不安から、《自己判断を求められたワクチン接種への不安》と表した。

「ワクチンを接種するのが怖いという意見。私も同じです。心の準備ができないまま2回目まで予約が取れちゃって。定年退職した夫と二人暮らし。ここ最近は外食も遠出もしていません。コロナにかかるような環境ではないと思うのですが、自分の意志とは関係なく、せかされているような気がして。接種の日が近づいていますが、土壇場でキャンセルしてしまいそうな気も。そんなことを話すと、『打てるだけいいやろ』と言われそうです。」

(3) 《ワクチン接種による副反応への不安》

このサブカテゴリーは、1回目の接種による副反応の経験や未知のワクチンによる副反応の不安が見られたことから《ワクチン接種による副反応への不安》と表した。

「新型コロナワクチンの1回目接種を終えましたが、接種後3日目あたりから下痢して、腸の中が空っぽになるくらい激しかったんです。あと、アレルギー体質でアトピー性皮膚

炎の症状があるんですが、接種翌日から急に悪化し、湿疹ができてしもて。2回目の接種が正直ごっつ不安です。」

(4) 《ワクチン接種会場の不備による不満》

このサブカテゴリーは、ワクチン接種を希望していても整備が不十分であることへの不満が示されたことから、《ワクチン接種会場の不備による不満》と表した。

「ネットで予約しようとしたら画面が出てこず。足が悪く、地下鉄とバスを乗り継いで大規模接種会場に行くのは無理。コロナに感染するのも怖い。社会の端におる人のことも考えて欲しい。」

7) 【長引く面会制限で抱いた相反する思い】

このカテゴリーは、以下の2つのサブカテゴリーで構成され、【長引く面会制限で抱いた相反する思い】と表した。

(1) 《入院・入所中の面会制限による孤独感》

このサブカテゴリーは、病院や高齢者施設では感染防止のために面会制限が実施され、家族と触れ合うことが難しくなったことで孤独感が生じていたことから、《入院・入所中の面会制限による孤独感》と表した。

「心臓疾患で約50日入院したが、コロナによる感染拡大防止のため妻とも面会が許されなかった。幸い医療スタッフに励まされて退院できたが、寂しさに耐えきれず命を落とす人も少なくないと想像した。」

(2) 《面会制限の中で家族と繋がれたことへの喜び》

このサブカテゴリーは、面会制限の中でも家族と繋がれたことに喜びを感じていたことから、《面会制限の中で家族と繋がれたことへの喜び》とした。

「高齢者施設での面会が制限されるなか、大阪府の特別養護老人ホームAでは防護服を着用することで、家族の面会が再開された。入居する母と面会した70代の女性は、約1年ぶりの再会に『防護服越しでも触れ合うことができて本当にうれしい』。」

8) 【これまでとは異なる最期への思い】

このカテゴリーは、以下の3つのサブカテゴリーで構成され、【これまでとは異なる最期への思い】と表した。

(1) 《家族の最期を見送ることができたことへの有難さ》

このサブカテゴリーは、コロナ禍で面会もままならない中、家族の最期を見送ることができ、有難さを感じていたことから《家族の最期を見送ることができたことへの有難さ》と表した。

「夫がとうとう逝きました。コロナ禍で面会もままならない中、病院から一度会っておくようにと連絡がありました。またかと

思いつつ赴くと、様変わりした夫がうっすらと目を開け、うつろな表情だったのが、私と分かったのか手をしっかり握り、口をパクパクさせて何か言おうとしているのです。『アリガトウ』か、と聞くと、まぶたを動かしてうなずくのです。(中略)この『アリガトウ』で全て帳消しです。私も前向きに生きていけます。』

(2)《家族の最期を見送ることができなかったことへの無念》

このサブカテゴリーは、感染防止のために家族の最期を見送ることができず無念を感じていたことから《家族の最期を見送ることができなかったことへの無念》と表した。

「あつという間に亡くなって。家族の誰にも会えず、どんなに寂しかっただろうと、残念でなりません。こんな悔しい思い、私たちだけで十分です。」

(3)《望む最期と叶わない現実の受け止め》

このサブカテゴリーは、自身が望む最期が叶わない現実を体験したことによる思いが表出されていたことから、《望む最期と叶わない現実の受け止め》とした。

「(父は)生前、『先に火葬をして、斎場に(父が育てていた)植木を飾り、眺めながら宴会をしてくれ』と話していた。大勢の人が見守る中で送り出したかったが、(中略)葬儀は見送らざるを得なかった。」

9)【感謝を忘れず周囲を思いやる気持ち】

このカテゴリーは、以下の3つのサブカテゴリーで構成され、【感謝を忘れず周囲を思いやる気持ち】と表した。

(1)《人に感染させまいとする気遣い》

このサブカテゴリーは、感染対策行動をとる背景として自分が他者に感染させることへの恐れが原動力になっていたことから、《人に感染させまいとする気遣い》と表した。

「(1回目の接種を終えた70代男性は)『自分は来月に2回目を受けるが、みんなにワクチンが行き渡るまではマスクを取るのも遠出も憚られる。元通りの生活はまだ先かな』と依然、接種を待つ多くの人たちを気遣った。」

(2)《周囲の人の健康を願う気持ち》

このサブカテゴリーは、家族や地域・社会全体がコロナに感染することなく元気に未来に向かっていけることを望んでいたことから、《周囲の人の健康を願う気持ち》と表した。

「(高校を卒業し、新たな門出を迎える)成長した孫の後ろ姿を見送り、私は思わず感情が高ぶり、涙がとめどなくこぼれた。孫はいくつになっても可愛いものだ。これからもコロナウイルスの感染予防対策をしっかりし、感染しないでと祈るばかりだ。」

(3)《自身の健康や安全を守ってもらっていることへの感謝》

このサブカテゴリーは、ワクチン接種ができる環境をはじめとし、自身の安全が周囲によって守られていることへ感謝していたことから、《自身の安全を守ってもらっていることへの感謝》と表した。

「身を削って働く医師や看護師に、私は敬意と感謝でコロナ禍を過ごしてきた。接種中、ありがたさがこみ上げてきた。自分でも驚くほど胸がいっぱいに。ワクチンを研究開発した専門家、神経を注いで輸送した運送業者、地方行政の職員、皆さんの熱意と大きな努力にお礼を言いたい。」

10)【困難な中で前向きに生きる気持ち】

このカテゴリーは、以下の5つのサブカテゴリーで構成され、【困難な中で前向きに生きる気持ち】と表した。

(1)《自粛生活の中で習慣や楽しみを新たに見出した喜び》

このサブカテゴリーは、自粛により趣味などを我慢することが多い日々であっても、新しいことに挑戦したり、新たな楽しみを見つけていたことや、生活が変化しながらもそれに適応し新たな習慣としていたことから、《自粛生活の中で習慣や楽しみを新たに見出した喜び》と表した。

「コロナ禍で外出を避ける生活が続く。好きな映画や絵を見に行くのも我慢の日々だ。自宅ですることをいろいろやってみたが、今夢中なのは『着物』だ。(中略)楽しい思い出にも浸った。」

(2)《長い人生の思い出や経験を振り返り生じた前向きな気持ち》

このサブカテゴリーは、今まで様々なことを乗り越えてきたからこそコロナも乗り越えられると前向きになっていたことから、《長い人生の思い出や経験を振り返り生じた前向きな気持ち》と表した。

「結婚記念日を迎えたので今までを振り返ると波瀾万丈の人生でしたが何とかやってきた。今はコロナで大変だけど必ず元に戻るから何とか負けずお互い頑張ろうと言いたくて。」

(3)《周囲によい影響を受けて今を前向きに生きる気持ち》

このサブカテゴリーは、自然やニュース、新聞、人との関わりによって前向きになっていたことから、《周囲によい影響を受けて今を前向きに生きる気持ち》と表した。

「コロナ自粛で外出を控え旬の食材を使ってつくだ煮を炊いて、一人でも多く元気づけようと思って周囲に贈り物をしたところ、皆さん元気が出たと喜びの声が返ってきた。思い出話、談笑をしたが、おしゃべりや笑いで活気が生まれ

元気も出ます。前向きに前向きに。」

(4) 《人との関わりを励みに自分も頑張ろうと思う気持ち》

このサブカテゴリーは、制限された日常の中であっても、友人や家族、近所の人との関わりを励みに自分の気持ちを高めていることから、《人との関わりを励みに自分も頑張ろうと思う気持ち》と表した。

「学生時代の友人とのグループラインが楽しみ。友人のラインで刺激を受けたり、写真を送りあうなど私も頑張ろうと思わせてくれます。」

(5) 《今後の生活に夢や希望を抱く気持ち》

このサブカテゴリーは、家族と記念日を祝いたい、趣味や社会活動を再開したい等、今後に希望を抱いていたことから、《今後の生活に夢や希望を抱く気持ち》と表した。

「神戸空襲の犠牲者を弔う会は新型コロナウイルス感染防止のため昨年に続き一般参列は中止。代表の方が『コロナで大変だが遺族にとってこの場がいかに大切か実感した。先人たちの体験や平和への思いを引き継いでいく』と決意を語った。」

VI. 考察

コロナ禍における高齢者のくらしの実態からみた特徴的な思いについて、以下に述べる。

1. 平和な時代を経て人生の終盤を生きる高齢者にとって、戦争時代の経験に重ねた思い

高齢者のくらしの実態からみた思いとして、【戦争時代の経験に重ねた現状の受け止め】が挙げられた。COVID-19の感染拡大により平穏な日常を奪われ不便な生活を強いられたのは、どの年代の人々にも共通しており高齢者に限ったことではない。しかしながら、人生の終盤を生きる高齢者は、苦しい戦前戦後を経て平和な時代を生きてきており、【人生の終盤に生活の豊かさを失った悲しさや寂しさ】に示されたように、くらしの安全や安心が再び脅かされた状況は他の発達段階を生きる人々とは異なり高齢者の特徴的な思いが示されたといえよう。

加えて、高齢者の戦争時代の経験は、多くの人々は幼少期から学童期にあったため、その後長い年月をかけて、辛い経験を意味あるものに変えてきたことが推察される。高齢者にとって人生の終盤を生きる今、生活の豊かさを失うことは、残された人生に限りがあるからこそ、【喪失が増える中で残された人生への不安】を抱く状況となっていた。

つまり、高齢者は死が身近にあるため、これまでのように平和な時代を取り戻す時間がないことを他の世代よりも実感していることから、このような思いが示されたものと考えられる。また、これらは Erikson ら (1986/1997) が述べている老年期の心理社会的課題である「統合対絶望」の「絶望」を助長しかねない状況にあると考えられる。一方、沖縄県の高齢者を対象にした戦争体験の回想に関する研究 (吉川、田中, 2004) では、忘れてはならない大事な体験として戦争体験を回想しており、高齢者のライフレビューと心理社会的発達の研究においても戦争体験は高齢者にとって心身ともに厳しく辛い体験であるにも関わらず、人生において重要な体験と位置づけられている (五ノ井, 下仲, 2010)。したがって、コロナ禍の高齢者の経験についても、ライフレビューや語りを丁寧聴く等により、「絶望」が助長されることなく、意味ある経験となりうる可能性が示唆された。

2. これまでの経験を超えた恐怖やストレスにさらされながら人生の最期を過ごす気持ち

高齢者は、COVID-19の感染拡大によって、【ぬぐいきれない感染への恐怖】を感じていた。これは、特に高齢者は、COVID-19に感染しやすく、感染すれば重症化しやすく致死率も高い (忽那, 2021) 特徴、爆発的な感染拡大が起こり医療が逼迫し感染しても入院できなかった第4波の状況、すなわち、安全・安心ではない、常にストレスにさらされる状況にあったからと考える。

また第4波では、高齢者は【新しい生活様式になじまないことへの戸惑い】や思うようにワクチン接種が進まないことで【ワクチン接種・予約に関する不安や不満】を抱き、《自己判断を求められたワクチン接種への不安》のなか接種を経験していた。

さらに、【長引く面会制限で抱いた相反する思い】を抱きつつも、COVID-19の重症化が早い特徴から延命治療や最期の選択を前触れもなく迫られ、状況の変化に心情が追いついていない現状があった。さらに、家族に看取られず亡くなる実態から【これまでとは異なる最期への思い】として、《望む最期と叶わない現実の受け止め》が示された。服部 (2020) は「人は様々な自分の生涯を意味のあるものにまとめ、自我の統合を行っている」と述べている。自我の統合のためには最期に向かう過程の中で「自分の生涯は意味あるものだった」と思える環境が重要となる。しかし、【長引く面会制限で抱いた相反する思い】に示さ

れたような、面会という家族とのつながりを実感できない環境で最期を迎えることは、人生の統合をできないまま亡くなる可能性が否定できず、援助を要する状況にあった。

以上のように、コロナ禍の高齢者は、長期間にわたり命を脅かされる状況のなかで、これまで提供されてきた医療や福祉サービスの急激な変化に適応し続ける生活を余儀なくされてきた。したがって、人生の最期の過ごし方にも重大な影響を受けている思いが示されたといえよう。

3. 困難な中でも前向きに生き、他者を思いやる気持ち

一方、本研究では、コロナ禍に生きる高齢者の強みが発揮されていたことも明らかになった。特に、【戦争時代の経験に重ねた現状の受けとめ】では、未経験の困難の中でも長い人生経験から体得した高齢者特有の俯瞰的な捉え方が示された。また、文通や新聞という高齢者に馴染みのあるツールから人とのつながりを実感して【困難な中で前向きに生きる気持ち】も明らかになった。また、新たな楽しみや習慣を作ろうとする力強さや【感謝を忘れず周囲を思いやる気持ち】という強みが他者との関わりによって生じていることが示された。つまり、本研究においてコロナ禍における高齢者のくらしでは「絶望」を助長した可能性のある状況にも関わらず、長い人生経験を活かし前向きに生きる強さや他者への思いやりが示されたことから、Eriksonら(1986/1997)の提唱する老年期の心理社会的課題である「統合」が促進されていたものと考えられる。そして、この統合の促進に人との繋がりが関係していたことは、コロナ禍において報告された先行研究(秋定ら, 2021)と一致し、老年期を健康に生きる上で重要と考えられた。

以上のことから看護実践への示唆として、コロナ禍のような「絶望」を助長した可能性のある状況では、これまでの人生経験を基に培われた前向きに生きる強さや他者への思いやりを強みに、高齢者の発達課題である人生の統合が促進されることを目指す援助を行うことが考えられる。具体的には、高齢者の辛い経験が意味ある経験になるように、人生の統合に繋がる可能性を念頭におき、経験を意味づけられるよう思いを傾聴すること、家族との面会や前向きになれるように人との繋がりを保つ環境を整えることが重要である。

VII. 研究の限界と今後の課題

本研究では、新聞記事をデータとしたことから、比較的強みを発揮しやすい高齢者の思いが抽出された可能性は否めない。研究のデータは、新聞記事の分析によるものであり、本人の投稿や語りが含まれている記事を対象としているものの、高齢者から直接得た語りではないことが限界として挙げられる。今後は、本研究の結果を基に、高齢者自身の思いのインタビューや公開されている公的機関による経験談のデータベース等を活用し、より高齢者の実態を反映させた知見を導くことが課題である。

本研究においてCOIに関する申告はありません。

VIII. 引用文献

- 秋定真有, 水川真理子, 稲垣真梨奈他. (2021). コロナ禍で看護大学が実施するオンラインによる「もの忘れ看護相談ミニ講義」参加者の力が発揮される支援のあり方. コミュニティケア, 23 (11), 31-35.
- Erikson, E. H., Erikson, J. M. (1986). 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳 (1997): ライフサイクル、その完結. みすず書房. (原著名: The Life Cycle Completed)
- 五ノ井仁美, 下仲順子. (2010). 高齢者におけるライフビューと心理社会的発達の関連. 文京学院大学人間学部研究紀要, 12, 323-340.
- 服部祥子. (2020). 生涯人間発達論—人間への深い理解と愛情を育むために—第3版 (p.171). 医学書院
- 林智也, 石井健. (2021). 新型コロナウイルスのパンデミック収束のためのワクチンサイエンス. 医学のあゆみ, 278 (10), 922-927.
- 平山正実. (1995). 第5章 ライフサイクルからみた老いの実相. 南博文, やまだようこ (編), 老いることの意味—中年・老年期 (講座生涯発達心理学 5) (p.155). 金子書房.
- 市戸優人, 大内潤子, 林裕子他. (2021). 北海道におけるCOVID-19感染拡大防止策が高齢者に与えた生活への影響外出自粛要請下における高齢者の健康行動と生活の困りごと. 日本看護研究学会雑誌, 44 (2), 185-192.
- 梶原杏奈, 牧正興. (2008). 家族同居高齢者の孤独感

に関する研究. 臨床心理学, 5, 7-14.

神戸市新型コロナウイルス感染症対策第2次対応検証
チーム. (2011). 神戸市新型コロナウイルス感染症対策
第2次対応検証結果報告書.

忽那賢志. (2021). 【高齢者のウイルス感染症の現状と対
策】新型コロナウイルス感染症 (COVID-19), 日本老
年医学会雑誌, 58 (1), 65-69.

大西権亮, 廣瀬英生, 伊左次悟, 他. (2021).
COVID-19流行に関連した外出自粛で高齢者は活動
頻度低下を感じているか?. 日本プライマリ・ケア連合学
会誌, 44 (2), 68-73.

田中友規, 高橋競, 秋下雅弘. (2017). フレイル予防のた
めの社会参加: 社会的フレイルのインパクト. *Geriatric
Medicine*, 55 (2) :159-163.

吉川麻衣子, 田中寛二. (2004). 沖縄県の高齢者を対象
とした戦争体験の回想に関する基礎的研究. 心理学研
究, 75, 269-274.

Watanabe,K.,Tanaka,E.,Watanabe,T.etal. (2017) .
Association between the older adults' social
relationships and functional status in Japan
Geriatrics&Gerontology International,17(10),1522-
1526.

山口舞, 平田弘美. (2018). 家族と同居する高齢者の思
いに関する質的研究. 人間看護学研究, 16, 1-8.